
携帯なくても恋愛できる

ぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

携帯なくとも恋愛できる

【著者名】

ぐり

【Zマーク】

Z2050F

【あらすじ】

アキとダイキは恋人同士。ある日父親の実家に里帰りしてきたダイキが突然の爆弾宣言。

まわかの出来事

鏡の前で色々なポーズを取りながら、アミは嬉しさに湧き上がる笑みを隠しきれずにいた。

「久々のおデート」たつた一週間、されど一週間。彼、ダイキの父親の実家は携帯の圈外と言つてド・ド・ド田舎。買物とかに出た時にごく短いメールが来るのみの淋しい夏休み中の一週間。

「それも今日で終り」鏡の中の自分にニッコリ微笑む。携帯の使えない不便な所では生活出来ないと実感したアミ。これからは何時でも連絡が取れる。まさに携帯バンザイ!!!!!!

ダイキが留守の間に友達とショッピングして、買ったばかりの服に身を包みイザ!~!~!~!

待ち合わせ場所に行くとすでにダイキは待っていた。

「ん…?」

ダイキの腕には見覚えの無いと言つた今時付けている人の方が少ない腕時計が。

『でも、腕時計で時間を確認する姿つて言つのも良いかも』なんて思つた事を後悔する事になるとその時のアミは思つても居なかつた。

「おまたせ」わざとおどけたように言つ。

「今日はどうする?」小首をかしげるように聞く。

「うん」ダイキの様子は何事かを考えている感じ。

「ちょっと話があるんだ。長くなるかも知れないから何処かゆっくり話が出来る所がいいんだけど」

アキの中で危険アラームが鳴る。色々な思考が行き交つ。

『まさか、別れ話?』

『ド田舎に行つてゐる間に女が出来た?』

『良くない、兎に角良くない事が起りそつた予感』

「ちょっと前に出来たドーナツ屋行こう」

夏休みに入つてすぐに、手作りドーナツの店が開店した。プレーンドーナツに色々なトッピングが付けられるのが売りで仲間内でも評判が良い店だつた。

店に入つて、ドーナツと飲み物を受け取り奥まつた席に座る。
今日はお客様は少ない。

「親父の実家に行つて居た理由話したつけ？」

「たしか、従兄弟の結婚式だって言つていたよね」

—その事も関係する話なんだけど……

早くに家を出たタイギの父親の元妹が近くに住んでいた。そこ

「とにかく、携帯圏外の田舎だろ？　車でちょっと出れば携帯使えんだけじさ」

久しぶりに会ったダイキに年上の従兄弟夫婦は気を使つてくれたら

「で、その話を聞いていて思つたんだ」

セリオで書いた「一ノ瀬」を一口。

「お前の事ほんとに好きだ」
「…」

レート、ど真ん中ストライク！――

「そんなん、私だつて……」「

アキは顔が真赤になるのを必死に抑えようとしていた。

『そんなん、私だって一緒やん』

ダイキはかなりのイケメン。パソコンにも詳しくて成績もトップクラス。そんなダイキの彼女になれてアキは凄く鼻が高かつた。

「俺達の間で携帯使つのは辞めないか？」

今度は顔色が悪くなるよつた発言。

「ハル兄ちゃん達は殆ど携帯使えない状態で結婚まで行つたんだ。
俺らだつて、携帯使わなくても恋愛出来るんと違うかなあつて思つ
て」

「ちよ、ちよつと待つて。連絡取りたい時はどうあるの?」

「家電あるやん」

『家電つて……。』

言葉の出ないアキ。携帯を使わないなんて無理に決まつていて。
「急な事で混乱してると思つんで返事は今じゃなくても良いから。
月曜に部活で学校来るだろ? その時に答が出ていたら「パソコン
ルーム」に来てくれれば、俺九時五時の間は居るから
言つだけ言つたら、「じゃあ、そろそろ帰ろつか? 送つていいくよ」と涼しい顔。ダイキは自分がどれほどの爆弾を落としたのか気付いて居ない。

「携帯使わない恋愛、想像も出来ないだる。でも家に帰つて母親に
聞いてみろよ。母親達の時代は携帯なんてなかつたんだから」
家の前でそれだけ言つと、ダイキは手を振りながら帰つて行つた。

時計

中途半端に時間が空いてしまった。今日はゆっくりダイキと過ごす予定だった。

「早かったのね」

母の言葉を背に受け、生返事を返しながら

『自分の母親が恋愛を語る姿は想像外だわ』と思つ。

自室のベッドに横になつて今日のデータを思い返してみると、ふと腕時計を見るダイキの姿が浮かんだ。

「たしか……」

母の妹、つまり叔母が高校受験の年に贈つてくれた腕時計があったのを思い出した。机の引き出しの一番奥。

「止まってる」

秒針の動かない時計を見ている内に

『やうだ、ミキちゃんに聞いひ』

叔母のミキなら、一人暮らしだし聞き安い気がする。オシャレで自立している女性というイメージがあるミキの恋話なら聞いてみたいし。

早速メールする。丁解の返信を確認するとアキは手早く荷造りして、部屋を出た。

「お母さん、ミキちゃんの所にお泊りしてくれる

そう言つと

「あつやつ。それならコソで何か買つて行きなさい」

お金を受け取るついでに時計を差し出す。

「これ、動かないんだけど」

「電池切れてるんじゃないの?」

「直るの?」

駅前の時計屋に行けば電池交換してくれると聞いて寄つて行く事に

する。

「ほう」「

アキから渡された時計を持った時計店のおじさんは息をついた。

「これは良い時計だ。お嬢さんが選んだのかい？」

叔母が選んだと言うと、しきりに頷く。

「この時計を選んだ人は、時計を知っているね。長く大事に使うといい」

などと言いながらも手先は器用に動く。さほど時間もかからずに時計はアキの元に返ってきた。

「はいよ。電池交換千円。時刻も合わせておいたからすぐにはめられるよ」

料金を払い早速腕に嵌めようとすると上手く行かない。

「ほらっ、こっちの腕に文字盤を内側にして嵌めるんだよ」

『文字盤？ああ、この時計になつてている部分。でもダイキは外側に向けていたような…』

「男性は外側、女性は内側。それが時刻を確認する仕草が綺麗に見える位置なんだよ」

左手内側に時計部分を向けてベルトをしめる。

「じつやつて、手首をクルツト回して見るんだ」

「こう？…なるほど」

自分が急に大人になつた気がした。

「ありがとうございました」

駅への道すがら何度も時間を確認する。

ミキへの手土産も買い忘れ、マンションの近くの洋菓子屋で慌ててケーキを購入した。

ミキは設計士だった。一緒に事務所に勤めていた男性と結婚する予定だったが、結婚に先駆けて独立した男性が事業に失敗して失踪してしまつたらしい。もとの勤め先であつた事務所が放り出された

仕事のフォローを押し付けられ、ミキは職場にも居辛くなつて辞め
たらしい。

後に、バリヤフリー建築の勉強をして今はフリーで契約して福祉
施設や個人住宅の設計をしたり、雑誌に記事を書いたりしている。

「あんな男に騙されて」

と呆れ顔で母が話していた事を覚えている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2050f/>

携帯なくても恋愛できる

2010年11月24日16時05分発行